

台湾のカリキュラム改革と学びの共同体の実践

草薙 佳奈子 (学校教育高度化センター 特任研究員)

1. アジアのカリキュラム改革と学びの共同体

日本で始まった授業研究は、教師が協同的に授業改善に取り組む有効なアプローチとして世界中で実践が行われている。2007年には世界授業研究学会(WALS)が設立され、2011年には国際学術誌が発行されるなど、研究も国際的に蓄積されてきている。このうちアジアの実践の特徴として、2000年代前後に各国で21世紀型の学力・スキルを目指した新カリキュラムが導入され、現場では教師主導型から生徒の主體的な学びを目指した授業スタイルへ変容が迫られていることから、授業研究を取り入れた研修が行われている。その中でも、中国、韓国、台湾、インドネシア、ベトナム、台湾では、「学びの共同体」と呼ばれる学校改革のアプローチが広まっている。「学びの共同体」は、学習院大学教授の佐藤学教授が提唱する、一人残らず子どもが学ぶ権利を保障するため、教師専門家として成長し、地域コミュニティが支える、民主的な学びの共同体の形成を目指した学校改革であり、古くから校内研修として実践されている授業研究と区別される。

2. 台湾のカリキュラム改革と学びの共同体

台湾では、2001年に21世紀型に必要な能力の育成を目指して、大幅なカリキュラム改定が行われた(Law 2004)。さらに2014年に9年義務教育から12年義務教育となり、高校の受験制度が廃止された(黄2014; MOE 2015)。これにより、これまで受験対策を中心としていた授業の様子も一変することとなった。こうした中、佐藤学教授のインタビューが雑誌「親子天下」(陳・陳・陳2014)で紹介され「学びの共同体」が広く知られるよう

になり、2012年に中国語で出版された佐藤氏の著書「学習的革命」は、1年で出版社のサイトからだけでも8000部売れるなど、多くの教師に読まれた(陳・陳・陳2014)。陳ら(2014)によれば、「学習的革命」の出版後、学びの共同体が最新のトレンドとなり、学びの共同体の授業の特徴の一つである「コの字型の授業にしましたか?」というフレーズが教師の間で挨拶代わりに使われるようになったという。台湾政府が佐藤学教授を招聘した講演で、理念に賛同した台北市、新北市、新竹市、台中市の教育局長が学びの共同体の推進を表明したこともあり、1年以内に100校以上が学びの共同体に取り組むようになり、多くの教員が日本へ視察に研修に訪れ、学びの共同体コミュニティが形成されるようになった(陳麗華personal communication 2016年12月28日; 果2016)。

アジアでは、従来型の授業研究が研修制度としてのトップダウンで推進されている特徴がある。学びの共同体に限定すれば、日本では教育委員会が推進している例はごくわずかであり、台湾のほうが急速に広まっている。また台湾ではトップダウンの取り組みに加え、教師の自主的な取り組みが校内の一部の教師によって実践されているという特徴がある。また、実践を支援する研究者やネットワークも形成されている。台湾教育師範大学で長年教鞭をとった歐用生教授は、佐藤学教授と親交が深く、東京大学に客員経験もあり、台湾全土に教え子がおり、普及に大きな役割を果たしている。このように、実践を支える大学の研究者、教育委員会の指導主事とのネットワークも確立されている。オンライン上でも台湾全土の学びの共同体関係者のFacebookコミュニティが形成

され学校を超えた交流が行われており、2014年時点での登録者数は892名で（黄2014）、現在は更に多くの教育関係者の登録がある。

本調査では、このような学びの共同体の普及が、台湾の学校現場でカリキュラム改革と連動して実践されているのか、台北市と新北市の小学校2校の調査と文献調査をもとに考察した。

3. 新北市A小学校の実践

A小学校の公開研修会は、市主催の研修会として、「興大師有約」（大師との約束）というタイトルで、佐藤学教授の講演を中心に、市内の教師数百人が参加する大規模な研修会として実施された。台湾の都市部の学校は大規模校が多く、A校も2000人以上の児童、80クラス、150名の教師の大規模校である。A校は校長のリーダーシップにより、学びの共同体に取り組んでいる。教師の人数が150名と多いこともあり、全校として取り組むのではなく、興味のある教科やテーマを選んで教師が参加している勉強会のうちの1つが学びの共同体に取り組んでいた。台湾の学校は教員組合、PTAの力が強く、校長の人事権を握っていることもあり、校長が改革を押し進めにくいという事情もある。公開研修においても、希望した教師が学びの共同体に取り組んでいて、授業公開を行っていない教師もいると説明された。こうした事情に配慮し、非公開のクラスには入らないように校長から参加者に注意があり、個々の教師の事情に配慮されて研修会が行われていた。

焦点授業が実施されたのは、理科と国語のクラスであった。理科のクラスでは、電流の流れについて2つの装置を使って実験を行い、観察結果や意見を話し合うという授業であった。国語のクラスでは、星の王子さまの登場人物の道德感などについて話し合いと発表が行われた。

表1：A校公開研修会スケジュール

08:50-09:20	受付
09:20-09:40	児童のパフォーマンス
09:40-10:10	授業公開
10:30-11:10	焦点授業（国語、理科）
11:10-12:00	協議会
12:00-13:00	ランチタイム
13:10-14:40	佐藤学先生の講演（1）
14:40-14:50	休憩
14:50-16:10	佐藤学先生の講演（2）
16:10-16:40	歐用生先生との対話 （質疑応答）
16:40-17:00	サイン会

授業では、特定の優秀な生徒が連続して挙手し発言する、話し合いの中でもリーダー的存在の子が議論を主導する様子が見られ、生徒同士の競争的な関係性も見受けられた。授業後の協議会では、子どもの様子について活発な意見交換が行われ、教師が子どもの意見を誘導せず子どもの発言を尊重して議論を続けた点が評価されていた。焦点授業を行った二人の教師は、協議会で優れた手法が賞賛されるなど授業力がある教師として評価されている様子がうかがえた。研修会では、佐藤学教授より、台湾の学びの共同体の広がり、台湾の他の地域や中国の学校の実践の紹介、4人グループの利点、他の国の授業スタイルの変化と学びの共同体の協同的な学び、などの内容について講演があった。参加者からは、生徒が学び合いに参加したくない場合どうしたら良いか、特定の子が常に発言しようと主張して来る場合どのように対応すれば良いのか、子どもにとって公開研修は大勢の大人に見られプレッシャーになるのではないか、などの質問があった。

A校では、「教師專業發展評鑑」という2006年頃から教育省により推進された教師の専門性を向上するために評価システムを取り入れた研修に

取り組んでいた。この教師専門発展評鑑と学びの共同体を連携して校内研修を行っており、この連携について自校の教師にインタビューした結果を報告としてまとめ、教育局から優秀賞が授与された。報告書によれば、学びの共同体と教師専門発展評鑑は準備、観察、議論が行われる仕組みは似ているため、後から学びの共同体が導入された際に理解しやすかった。その一方で、学びの共同体は個々の教授スタイルが尊重される一方、これまでの教師主導の授業スタイルと異なるため、教授法が制限されると感じる教師や、評価基準がわかりづらいと感じる教師もいた。しかし多数の教員は、両方を導入することで、学校の授業が改善されると感じていると報告されている。

こうしたことから、A校の実践では、専門性の向上を目的に、革新的な授業へのアプローチとして学びの共同体が実践されている様子が伺えた。

4. 台北市B小学校の実践

B小学校は台北市の町中に位置し、比較的裕福な家庭の子が通う学区にある。10年ほど前にオープンスクールの波があった時期に建てられた最初の3校の内の1校で、教室にドアはなく、同じ学年の他のクラスの様子も感じられる環境となっている。保護者の話によると、この学校は施設設備が良い他、先進的な教育に取り組む学校設立当初の校長の理念に共感して子どもを通わせている親も多いという。しかし、校長によると、大多数の子どもが塾に通っており、塾の復習を行うような質の低い授業が増え、教師の質の低下が問題となり、PTAの要望により前任の校長が退職した経緯がある。今年度就任した現在の校長が学びの共同体を推進し、今回視察した研修が学びの共同体に取り組む決意表明の場であり、この学校における学びの共同体のキックオフになるとのことであった。校長は研修のオープニングで、教師が対話できる空間を作りたいと話した。公開研修では、授業準備は協働して行い、同じ内容の授業を

複数の教師が実践するというスタイルがとられた。今回授業公開を行ったのは、9名の教師（表2参照）で、授業別の協議会に大学の研究者もしくは指導主事が講師として加わり、教科の内容を中心に話し合いが行われていた。協議会においても、学びの共同体のやり方に則って4人グループで教師間で議論が行われ、研修の参加者が受け身でなく参加できる工夫がされていた。授業を見学した印象は、個々の授業スタイルが確立されており、教師の発言は控えられ、生徒の思考を元に授業を進めていく様子が観察された。

表2：B校研修会スケジュール

09:00-09:30	受付
09:30-09:50	開会式
10:05-10:25	説明
10:35-11:15	公開授業 1組：5年生社会 2組：5年生社会 3組：5年生社会 4組：5年生社会 5組：3年生美術 6組：4年生芸術 7組：2年生英語 8組：4年生英語 9組：6年生英語
11:20-12:00	各公開授業ごとに協議会
12:00-13:20	昼食
13:20-14:50	佐藤学先生の講演
16:10-16:40	陳麗華先生との対話

5. 考察

以上の2校という限られた調査ではあるが、台湾の学びの共同体の実践の特徴として以下が挙げられる。

- (1) トップダウン・ボトムアップ双方からの取り組み：台湾の学びの共同体の特徴は主に市の教育委員会の後押しと、佐藤学の著書の読書会など（陳・陳・陳・2014）で学びの共同体の理念に共鳴した現場の教師レベルとトップダウン・ボトムアップ双方からの取り組みにある。
- (2) 学校内での一部の教師の自主的な取り組み：保護者、教員組合の力が強いいため、学びの共同体の参加は教員の意志に委ねられている。教科を超えた取り組みが行われている一方、全校で行うことが難しいため一部の教員の勉強会として発展している。
- (3) 個々のスタイルの追求：自主的で先進的・実験的な取り組みとして行われているため、個々の教師が目指す授業スタイルの追求が見られる。

2校を訪問して、公開授業で子どもの様子をみようと真剣な顔でメモを取り、佐藤教授の講演にも熱心に耳を傾ける参加者の様子も印象的であった。また、佐藤教授にサインや写真撮影を求める参加者が後を絶たず、学びの共同体のブームを感じた。それには、カリキュラム改革で推進する受験スタイルの教授法からの転換と学びの共同体の仕組みがうまくマッチしたことがある。

授業実践からは、学習者の能動的な学び、学習者の実体験・実生活に即したテーマ設定、協同的な学習アプローチなど、受験対策のための講義中心の授業から変化していることが感じられた。その一方で、またこれも日本と同様に、公開授業を希望するのは力のある教師に集中したり、発表形式の授業でも発言する子どもが学力の高い層の子に集中する、グループの話し合いに加われない子がいる等、これまでの競争主義の授業のやり方

の名残ともいえるような現象も見られた。日本の実践との最大の違いは、学校全体ではなく、校内の一部の教師の取り組みであることで、これが学校改革の難しさにつながっていると思われる。

黄(2014)によれば、2012年に教育雑誌「親子天下」が行った調査によると、調査対象3千名の教師のうち95%が学校と授業の改革を行う必要があると答えた一方、半数がどのように行えばよいかわからないと回答している。2013年に陳麗華・陳茜茹(2013)が行った調査によれば、279校のうち33%の91校が重要な政策と連携した重要な研究テーマとして、学びの共同体を選んでおり、高い関心が伺える（陳・陳・陳 2014）。教師専門発展評鑑のような校内研修の仕組みや、教師の自主的な読書会の仕組みがあったことも学びの共同体の実践をし易い要件になっていると考えられる。

また、台湾と日本は教育システムや抱える教育課題も似ている。台湾は、日本の統治時代に整備された教育制度が現在も基盤となっており、カリキュラム改革に当たっては、アメリカ、イギリス、中国、香港、フィンランド、ニュージーランドと並んで日本のカリキュラムも参考にされた。総合的な学習の時間、道徳教育、掃除活動など日本と共通するカリキュラム内容も多く、全人的な脂質・能力の育成を目的とする教育理念が日本と類似している。更に、PISAやTIMSSなどの国際学力調査で学習意欲の低さが指摘される、受験競争やいじめの問題を抱えるなど、日本の教育現場と同じ問題に台湾も直面している。そのため、子どもの学びを保障するという学びの共同体の理念が受け入れられたものと考えられる。

6. おわりに

筆者がこれまで関わってきたインドネシア、シンガポールなど外国の授業研究の実践と比較して、台湾の学校の実践は日本の学校のそれと驚くほど類似していた。ジャンプの課題と呼ばれる探究的な問題設定、様々な意見の子どもの意見を聞

き合い学び合う授業スタイル、子どもの意見を元に授業を進行させるなど、これまでと異なる授業のやり方に挑戦し、質の高い学びを提供しようとする授業が観察された。これは佐藤学教授の著書が翻訳され広く読まれたこと、多くの教師が日本の学びの共同体の実践校を訪問し授業観察を行った結果であるといえるだろう。

佐藤は、台湾の学びの共同体は、1) 教師の高い専門知識、2) 校長の積極的な改革の意志、3) 教育局からの強い支持とサポート、4) 教員たちの熱意の点で有利な条件があると述べている（資2012）。その一方で陳ら（2014）は、コの字型の座席配置の導入だけの形だけの実践や、教員を評価する仕組みとして間違っている授業研究があることも指摘している。

学びの共同体は学校改革を目的としているため、既存の教員文化、学校文化の特色が出やすく、その実践は多様である。台湾の学びの共同体の難しさについて、佐藤教授は学校の規模が大きいことと学校で従来の筆記型の試験が多く協同的な学びを行いつらい環境を挙げている。学校関係者の話によると、カリキュラムが改革されても、親は依然として子どもを進学校に通わせたいと考えており、塾に通う子どもも多く、受験の影響は消えていない。こうした中、一人ひとりの子どもの学びを保障しその学びから教師が学び合うことを軸とした学びの共同体の取り組みは、教師の役割の変化や子どもの学びの変化と重なり、教師の協同の場として、発展しながら変化していくであろう。

参考文献

果哲「室裡的「寧靜革命」：每位學生都參與學習，沒有局外人」『The News Lens 關鍵評論網』、2016年10月7日
[<https://www.thenewslens.com/article/49895>]
(2017年1月15日にアクセス)

黄侑倫 (2014) 「グローバル化のなかで始動する対話の学校改革」『上野正道, 北田佳子, 申 智媛, 齊藤英介 (編著) 2014 東アジアの未来をひらく学校改革-展望と挑戦-』

陳麗華・陳劍涵・陳茜茹 (2014) 「你的教室OK了沒？臺灣導入學習共同體學校的模式與策略省思」『學習共同體特刊』2、18-45頁

賓靜蓀「教育大師佐藤學：真正的教育是所有人一起學習」2012年4月『親子天下』

Law, W. W. (2004). Translating globalization and democratization into local policy: Educational reform in Hong Kong and Taiwan. *International Review of Education*, 50, 497-524.